

2) ウノハナ／ウツギ＝卯の花／空木／卯木『*Philadelphus satsumi*』

ウノハナはユキノシタ科の落葉低木で、北海道から九州の低山地帯の日溜まりなどに普通に見られる。高さは2~3mで初夏、白い釣鐘状の花を無数に下垂させて咲く。花は密につけるために満開の時には葉が隠れてしまうほどで、地方によっては『ユキミソウ』とか『ナツユキソウ』などとも呼んでいる。これは花を雪に見立てたものだが、月や雲、波などにも例えられている。和名の由来は旧暦4月、つまり卯月に咲くため、幹の中心が空洞になっているので『空木』ともいわれている。学名は『*Deutzia crenata*』で、属名は植物学の発展に貢献したJ.ヴァン・デル・デューツ氏に因み、種小辞は「鈍鋸歯状の」という意味である。これと同じ仲間のもので『ヒメウツギ』といわれる種は、関東以西の山間地の岩場などに自生し、花はいくぶん小振り花期も10日ほど早い。このほかにも中部地方の東部山間地の岩上などに稀に生える『ウメウツギ』などがあり、これは花がまばらにつき、朝鮮半島に広く分布する。卯の花は昔から多くの人に親しまれていたせいか、この他にも別称が多く『ホネカラノキ』『ツユバナ』『アナウツギ』などと呼ぶところもある。

「卯の花の匂う垣根に／杜鵑はやも来鳴きて／忍び音もらす夏は来ぬ」と歌われた唱歌は、佐々木信綱の作詞で日本中の人々に親しまれてきた『夏は来ぬ』である。

『万葉集』では卯の花を詠ったものは24首あって、これはフジに次いで8番目に多い。『宇能花』とか『宇乃花』とか『宇花』『宇能波奈』などとも記しており、この花は圧倒的に杜鵑との対で歌われることが多く24首中18首にも及ぶ。

五月山宇能花月夜ほととぎす 聞けども飽かずまた鳴かぬかも
 宇能花の咲き散る丘ゆほととぎす 鳴きてさ渡る君は聞きつや
 平安時代になるとウノハナは『卯の花』と書かれるようになる。『枕草子』にも
 けしきばかりひきかけたるは、卯の花の垣根ちかうおぼえて、時鳥
 (ホトトギス)もかげにかくれぬべくぞ見ゆるかし。(205段)

と述べられており、『倭名類聚鈔』にもその名が見える。この花の季節は田に水が入り、農作業が忙しくなる。おりからホトトギスも盛んに鳴くところから、豊作への願いが重なったのだろう。ウツギは昔から豊凶を占う木として、花の多い年は豊作、少ない年は不作と考えられていた。桜や椿、躑躅や藤などと同様に暦やカレンダーがなかった時代、自然暦として季節を知る重要な花だったことを窺わせてくれる。

ヨーロッパでも日本のウノハナが公園や垣根などに植えられ、交配も行なわれている。また卯の花は特に蝶が集まる花としても知られ、蜜を吸いにやってくる。クロアゲハ、カラスアゲハ、シロチョウの仲間達、ヒョウモンチョウなど千客万来である。

この木は前述のように、幹の中心部は空洞になっているものの、木質部は固く緻密であるため、木釘として箆箆や木製の箱類、楊枝などにも用いられる。乾燥させた果実は腎臓病や利尿薬として効果があるといわれている。



ウノハナは野趣に富んだ白い花で、この花に出会うと、もう上着はいらない季節である。



夏が近いことを教えてくれるウノハナ。しかし東京周辺では同時期に現れるホトギスや
仏法僧の鳴き声を聞くことは、ほとんどなくなってしまった(群馬県藤岡市)



珍しい八重咲のサラサウツギの花は園芸品種で、豪華に見える(東京都文京区小石川植物園)。



ビッシリと花を付けたウノハナ、今年は豊作である。



巨岩のくぼみに育ったウノハナ、健気にも逆境に負けず花を咲かせている。この道は秩父方面から藤岡の工業団地をぬける『ふるさと街道』である。通るたびこのウノハナが気にかかる。



ウノハナを近くで見れば、こんな純白の清楚な花。この地では7月に咲く(長野県軽井沢町)。



マルバウツギの花(東京都文京区小石川植物園)。



同じユキノシタ科ではあるが、アジサイ属のガクウツギの花、学名は『*Hydrangea scandens.*』で、関東以西の本州・四国・九州の低山帯に広く分布する(長野県白馬村)。 [目次に戻る](#)